

オルドスの老木

襟裳（えりも）岬はかつて広葉樹の原生林が広がり厳しい風雪に耐えていた。その原生林が開拓と薪炭材向けの伐採で姿を消すと、アメダス観測日本一のえりもの強風に追い討ちをかけられた山肌は、またたく間に『えりも砂漠』と呼ばれる不毛の土地に変貌してしまった。

剥き出しの山肌からは表土が海に流れ込み、豊かな海の幸が奪われ『えりもの春は何もない』とまで歌われた。不毛の山肌に再び緑を取り戻そうと緑化事業が始まつて四十年がたつた。裸地に草を根づかせることから始ましたが、強風で種が吹き飛ばされてしまい失敗の連続であつた。試行錯誤のすえ海藻で種を覆つて植える、湿りと肥料となる二石二鳥の工夫を編み出してから、やつと草が芽を出し根づき始めた。

苦節四十年、えりも砂漠は緑の丘に甦つた。いまや十倍を超すまで成長したクロマツ林に山肌は覆われている。海にも青さが戻り日高昆布の漁場が甦つた。

人によって不毛の地となり、人の知恵と努力で再生された襟裳岬の姿を見て、東京

農大の山寺喜成さんの報告で知つた中国オルドス高原の老木『油松王』の孤独な姿とが二重映しに重なつた

北京から西へ五百キロほど、北へ大きく蛇行した黄河の懷に抱かれたオルドス高原は、半砂漠化した草原が果てしなく広がり、丘の上に樹齢およそ八百九十年の松の巨木がたつた一本だけ残されている。

かつてジンキスカンが駆け抜けた頃には豊かな森林が広がっていたが、伐採と放牧で土地は瘠せ続け、表土は剥がされ不毛化した大地に侵食は容赦なく削り、すべてを大黄河に押し流してしまつて。森が消え不毛化した土地が深く切り刻まれる姿を見続けた歴史の生き証人、オルドスの老木は孤独と沈黙の中に何を語ろうとしているだろうか。）